

ヨーロッパ・ツアー現地演奏会評(13)

「N響ヨーロッパ公演2020」の中から、2月25日に行われたパリ公演について、現地メディアによる演奏会評をご紹介します。

Res Musica

February 29, 2020

パトリック・ジェゼケル

パーヴォ・ヤルヴィとカティア・ブニアティシヴィリ フィルハーモニー・ド・パリでのコントラストに富んだプログラム

3つの作品が演奏されるこのコンサートは、冬の夜の集いにぴったりな、充実かつ元気の出るプログラムだ。メニューには、二人のスター、カティア・ブニアティシヴィリとパーヴォ・ヤルヴィ。もちろん、非常に正確な演奏のNHK交響楽団を忘れてはならない。

プログラムの最初の曲目は、ヨーロッパと日本の間のクルージングへと聴衆を誘いだす。武満徹の《ハウ・スロー・ザ・ウインド》(1991)のタイトルは、海を舞台にしたエミリー・ディキンソンの詩に由来している。それはこの作曲家がドビュッシーから多くのインスピレーションを受けており、同年に作曲された《夢の引用》では《海》が一種のマントラのように繰り返し引用されていることを考えれば、なんら驚くべきことではない。この曲でも、作品冒頭の七つの音によって構成される穏やかなモチーフが、波のように、譜面台から譜面台へと渡り歩き、毎回アレンジされながらも常に同一のものと特定できる方法で、聴くものの頭から離れず、定期的に繰り返される。洗練された、穏やかな音楽は、統率のとれたこの日本の交響楽団によって完璧にコントロールされている。彼らは限られた音のパレットの中で、存在を示したり、あるいは透明な存在になったりすることを心得ており、時に基底部に東洋のハーモニーが響いているのが聴き取れる。パーヴォ・ヤルヴィの自然体の落ち着いた態度、明らかに緊張のほぐれた様子は、彼の計画の一貫性をより一層明白にしており、聴衆は心地よさに身を委ねることができる。

続いて、ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェンの《ピアノ協奏曲 第3番》(1803)とともに、時代と美学、そして雰囲気ガラリと変化する。ドイツ風のロータリー・トランペット、コント

ラバスを持つこの交響楽団は、本当に日本の楽団なのか。なんにせよ、耳を驚かせてくれるのは、指揮者の指揮棒の下で生み出される交響楽団の丸みと柔軟性だ。鍵盤に指を置く前から、カティア・ブニアティシヴィリはこの一流楽団の男性的な力強い調子に合わせて体を揺らす。ついで、最初の旋律をマルタ・アルゲリッチさながらの熱情で披露する。だが、比較はここまでだ。というのも楽譜を完璧に知り尽くした彼女の演奏には、表層的な読みも少しの欠点も隠されておらず、とりわけ、ほとんど聴き取れないフレーズの終わりは秀逸である。ここでもまた、ヤルヴィの思考が作品に神経を行き届かせており、それは特にピアノとオーケストラの音の総体との間の完璧な均衡に見出される。ソリストは、三つの楽章のなかでもっとも情熱的な最終楽章で、その演奏の最高峰に達する。

休憩のあとに演奏されるのは、アントン・ブルックナーの《交響曲 第7番》(1883)だ。この曲目でもまた、目を閉じるだけで、ドイツ風のオーケストラに身を浸すことができる。この交響楽団は、雨に降られたかと思えば、陽の光に照らされたり、霧の中に見えなくなったりする登山者さながら、ある音楽の風土から別の音楽の風土へと、いとも巧みに雰囲気を変える。この音楽には、ワーグナーの幻影が、ほとんど身体的ともいえる存在感で、葬送のオマージュのようにつきまとっている。素晴らしい作品だが、話をどのように終えるか探しているような、より抽象的で饒舌な第四楽章のせいで、少し長く感じられる。オーケストラは示し合わせた調和の素晴らしさで完璧にマエストロに答えている。

フィルハーモニー・ド・パリの比類ない空間、グランド・サル「ピエール・ブーレーズ」で提供される、非常にセンスの良い、美しいひとときである。